

玄鶴山房

野口正人

一、執筆前

芥川龍之助が最後の力作「玄鶴山房」を執筆したのは、彼が三十五歳の大正十五年（昭和元年）十二月頃からあつた。そして、その翌年の昭和二年、中央公論一、二月号に初めて彼は、難産の末「玄鶴山房」を発表した。芥川が自殺したのは同年七月二十四日であるから、晩年の作品である。

この頃、芥川は極度の神経衰弱に落ち込み身心共に疲労しており「僕の頭はどうも変だ。朝起きてから十分か十五分は当り前であるが、それからちよつとした事（たとえば女中が気がきかなかつたりする事）を見ると忽ちのめりこむように憂鬱になつてしまふ。新年号をいくつ書くことなどを考えると、どうにもこうにもやりきれない気がする。」（十月二十九日、佐々木茂索宛）とか、「僕も新年号で手こずつている（中略）この頃の寒気に痔が再発。催眠薬の量は増すばかり。」（十一月十日、

佐々木茂索宛）「唯今新年号の仕事で、相かはらず頭が変にて弱り居り候間。アヘンエキスをを送り下さるまじく候や」（十一月二十一日、斎藤茂吉宛）「鴉片エキスをホミカ、下剤、ダエロナアル薬を食つて生きているやうだ。」（十二月二日、佐々木茂索宛）などと、薬を乱用し、原稿もはかどらないことばかりを手紙に書いている。このような状態のうちに、芥川は、最後の力作と自ら注するようになつて「玄鶴山房」の筆を取るのである。

二、執筆中

芥川は、昭和二年の新年号に「悠々荘」（サンデー毎日）「彼」（女性）「彼第二」（新潮）「玄鶴山房」（中央公論、二月号まで）を書いた訳であるが、いずれの作品も決して体調が十分の状態で書いたものでなく、むしろ最悪の状態で、特に「玄鶴山房」においては自ら「暗タンたる小説」とか「陰鬱なもの」と指摘する通り、もつとも彼の小説中楽しいとか愉快な小説は二、三

の例外を除きない訳であるけれども、この頃の小説（もしくは小説らしきもの）は極度に暗く、はつきりと死の臭をかもし出してゐるものがほとんどである。「僕は暗タンたる小説（どうも「玄鶴山房」のことらしい）を書いている。中々出来ない。十二、三枚書いてへばつてしまつた。冬眠、冬眠、その外のことは殆ど考えない。」

（十二月三日、佐々木茂索宛）の端書をみると、芥川は、どうも十二月初め、もしくは十一月末から「玄鶴山房」を書き始めたらしいことになる。そして、体調、その他のことに相応して芥川は自ら「玄鶴山房」の出来を予告さへする。小宮君日この頃神経衰弱が伝染して仕事が出来ない。僕日僕は仕事をしている。小宮君日、そんな死にも狂ひミタイなものとしよになるものか。但し僕のは磔なものは出来そうもありません。少なくとも陰鬱なものしか書けぬことは事実であります。」（十二月四日、斎藤茂吉宛）

この書簡中「死にも狂ひミタイなもの」とは当然のように芥川のことを指す訳であるが、この「死にも狂ひ」を芥川と取るか、それとも芥川の仕事と取るかは、はつきりと判断はつかないが、「僕ハ陰鬱極マル力作ヲ書イテキル。出来上ルカドウカワカラン。」と十二月五日に室生犀星に手紙を送つており、自ら「力作」と称し

ている点を見ると、どうも前の「死にも狂ひ」というのは芥川の仕事の状態であつて、芥川も相当に、この「玄鶴山房」には心血を注ぎ込んだようであるが、やはり晩年の芥川は、肉体的、精神的にも自信はなかつたらしく「出来上ルカドウカワカラン。」と弱音を吐いている。そして「玄鶴山房」を執筆し始めてから一週間から十日後の十二月九日にも出来上つていなく、「玄鶴山房」のことと思われる作品のことを「こちらは唯新年号に追はれているだけ。家へは新年は勿論、新年号の一部を書く為にもかへるかも知れません。（中略）今度は力作を一つ書くつもりです。」（十二月九日、下島勲宛）と記している。また「中央公論はとうとう出来上らなかつた」（十二月十九日、端書、佐々木茂索宛）と、なかなか筆が進んでいないことをもらしている。新年に入つても「唯今新年号の小説の続きを書きをし候へども心落ち着かず難渋この事に存じてゐます。」（一月十六日、斎藤茂吉宛）しかし、その三日後、芥川は中央公論社の高野敬録に「これでおしまひです。「五」は出来損ひかもしれません。しかしもう時間がありませんから、あきらめめることにしました。又実感の乏しい為、手を入れてもだめかと思ひます。十九日午前五時龍龍之介」と書簡を送つたことをみても一応十九日には完了している。

けれども、芥川は、時間に追われ、謙遜を含めても「玄鶴山房」のことをなつとくのかない作品であると自注している。それは、「『玄鶴山房』は力作なれども自ら脚力尽くる所、廬山を見る感あり。河童は近年にない速力で書いた。蜃気楼は一番自信を持つてゐる」(二月二十七日、端書、滝井考作宛)を見ても、芥川の本音であろう。そして、芥川が自ら「『五』は出来損ひかもしれない。しかし、もう時間がありませんからあきらめることにしました。」と書いている「玄鶴山房」の「五」ではなく、「六」の方が、つまり、最後の章の

The End. (追憶録)の方が、後に論議の焦点になるうとは、芥川自身予感すらしなかつたのではないだろうか。

三、位置

この作品の位置としては、いろいろな見解もあるうが「あきらかに、すでに死を意識していると思われる作品が登場するのは、大正十四年一月の『大導師信輔の半生』以後である。この作品と翌年の『点鬼簿』とは、鬼氣を感じさせるような、過去点検の作品である。その上に暗たんとした客観小説『玄鶴山房』がくる。」(磯貝英夫、解釈と鑑賞)『玄鶴山房』『齒車』『或阿呆の一生』

三編は、いずれも作者晩年の作品で(中略)これらの晩年の作品が、作者一塵の思想的決算であり、同時に大正文学の一終点である。」(中村真一郎)と云うのが、一般的であるが、例えば「芥川の物語作品群が『つくりもの』であるというとき、(中略)芥川の形式的構成功が自己の社会的安定圏から切断された如何に脆弱なものであつたかを意味している。このように考えてくるとき、芥川龍之介の作品的頂点が『蜜柑』『沼地』『妖婆』『雛』『一塊の地』などの作品にあることは明瞭である。そして、この系列の頂点に位置するのは『玄鶴山房』であつた。」(吉本隆明)という意見もある。が、いずれにしても、この作品は、芥川の『戯作三昧』『秋』『お律と子等』『庭』『一塊の土』の一連の家庭小説の頂点であるばかりでなく芥川の全作品の中でも、最も重要で、かつ秀作である。

四、評価

この作品は「芥川の最後の小説らしい小説」「私は、芥川が昭和二年に書いた作品の中では、小説としても『玄鶴山房』が一番すぐれていると信じる」(以上宇野浩二)「『玄鶴山房』は『蜃気楼』に一月ほど先立つて完成し、最後の短篇集『大導師信輔の半生』中最もすぐ

れた中篇であると同時に、彼の最後の本格的な作品であつた。」(吉田精一)「『玄鶴山房』には、最近の彼が懐いてゐる憂鬱な気魄が込み出ている。『玄鶴山房』には庄搾の美がある。」(室生犀星)「『秋』にしろ『お律と子等と』にしろ、(中略)それは一流の芸術品といえるのであろうが、これらの美しい小傑作を、そこまで

賞める勇氣はほくにはない。しかし、芥川は晩年の『玄鶴山房』にいたつて、一社会の心の型を描きながら、作者自身はその型から自由になつてゐるという理想的態度について到達してゐるといえるだろう。」(中村真一郎)そして、福田恒存は「ことに『玄鶴山房』は自然主義的な小説を好んで、芥川 之介をあまり高く評価しない批評家や作家たちにも認められております。(中略)つまり『お律と小等ら』から『玄鶴山房』にいたる道程に、ひとびとは芥川 之介のリアリズムを読んだのであります。この二作を『略上』や『秋』と対照してごらん下さい。あきらかに、この二つの作品にはリアリテイがあります。」と、誰もが、少なくとも晩年の作品の中においては第一等作品であると賞めたゞえてゐる。私も、この作品を、芥川の前期の、いわゆる王朝物とはなかなか対比しにくい、それでも芥川の全作品を通じて好きで、好きであると共に高く評価したい。それは、福田恒存の

言う「リアリテイ」があるばかりでなく、芥川の自殺を見つめて見た時に、「玄鶴山房」に漂う不気味で幽冥な世界が、死を導くと同時に死への反駁として描かれてゐるからであつて、枕頭のバイブルと溶けあう作品であると思われるからである。

五、Theobald's 論議

けれども又、芥川作品において、この作品ほど物議をかもし出した作品もめづらしい。それは、この作品に突如として出てきた重吉の従弟の大学生が持つていたリイブクネヒトの『追憶録』をめぐる論議である。

それは、『新潮』の合評会で話題となつたところで「何もリイブクネヒトでなくても、原敬でも、東郷大将でも、あるいは『苦楽』でもよい。」と、いう意見が出ている。しかし、芥川は、この意見に対して「『新潮』の合評会の記事を読み、ちよつとこの手紙を書く氣になりました。それは篇中のリイブクネヒトのことです。或人はあのリイブクネヒトは『苦楽』でも善いと言いました。しかし『苦楽』ではわたしにはいけません。わたしは玄鶴山房の非戯を最後で山房以外の世界へ触れさせたい氣持を持つておました。(最後の一回以外が悉く山房内に起こつてゐるのはその為です。)なほ又その世界の中に新時代のあることを暗示したいと思ひました。

(中略) リイブクネヒトは御承知の通り、あの『追憶録』の中にあるマルクスやエンゲルスと会つた時の記事の中に、多少の歎声を洩らしています。わたしは、わたしの大学生にもかう言ふリイブクネヒトの影を投げたかつたのです。」(三月六日、青野季吉宛)と、言うようにリイブクネヒトの線をゆずろうとはしていません。

しかし、吉本隆明は、「とつてつめたうに登上する重吉の『従弟の大学生』は、(中略)とつてつめたうに、リイブクネヒトの『追憶録』を読む。」と述べ、「『玄鶴山房』は、作品の構成から、この『従弟の大学生』の登上をまつたく必要としていない。ましてや、この大学生がリイブクネヒトを読むことを必要としていないのである。」と、はつきりリイブクネヒトや『追憶録』の必要性を否定しており、芥川が青野季吉への書簡に示したように、従弟の大学生に新時代をほめかしたことを、はつきりと不要とする。山本健吉も「名作『玄鶴山房』の結末に、リイブクネヒトを読む青年を登上させたかしたのも、新しい時代へのつまらない気兼ねでしかなかつた。」と述べ、宇野浩二のように「芥川の手紙の中に『その世界の中に新時代のあることを暗示したいと思ひました。』とか『わたしはわたしの大学生にもかう言うリイブクネヒトの影を投げたかつたのです。』とか言ふ

のは、これ亦、本当にさう思つたのであろうか、それとも『思ひつき』であらうか、と私は頭をひねるのである。ここで、ハツキリ言ふと、『玄鶴山房』を略かき終つたところで、芥川は、火葬場から帰りの馬車に乗つてゐる大学生に、自分がちよつと愛読した、リイブクネヒトの『追憶録』を読ましてみる気になつたのである。」と、言うように、リイブクネヒトをオチとみる見方も一種のリイブクネヒトを、吉本隆明のように顕著ではないにして、不要とする見方に相違あるまいと思われる。そして、青野季吉も「『玄鶴山房』を読んで見ると、あれはやはりリイブクネヒトでなくてはいけないのである。原敬や東郷大将では無論ダメであり、同じことでも、マルクスやレーニンではいけないのである。マルクスやレーニンの持つ強さと明白さではあの場合びつたりしない。それよりやはりリイブクネヒトである。『玄鶴山房』の中にとじこめられた非戯の終わりに、広い世間、それも動物的な社会の風をちよつと迎え入れて、そこで非劇の小説的浮彫を完成させる上にも、またこれが大切な点であるが、芥川氏の潜在だ要求を適当な形で満足させる上にも、やはりリイブクネヒトでなくてはいけないのである。『玄鶴山房』を読んだ時、最初にまず私に感ぜられたのはこの点であつた。」と述べてはいるものの、次には

「彼は、新時代を認めないではおれない。そして、その新時代を静かな眼で眺めているだけの、素直さと聰明さと、準備とを持つている。しかし彼は、彼の言葉をかりて言えば、『新時代と抱き合うほどの熱情』を持つていないし、そんな熱情が彼のような生活の歴史を持つた者に持ち得るものでない、とも考えるのである。」と、言つて、やはりこのリイブクネヒトに一点の擬惑を投げかけている。この意見には、吉田精一も「龍之介に対するこの解釈は見当のはずれたものでなかつたに違いない。」と、青野季吉に同調している。

私は『玄鶴山房』を読む限りにおいて、芥川が始めからリイブクネヒトを用意していて（もしくは新時代ということ）、リイブクネヒトに新時代を訴えさせたかつたと見る。それは「玄鶴山房」一の前半に「けれども今はもう赤瓦の家や青い瓦の家の立ち並んだ所謂「文化村」に變つていた。、、、しかし『玄鶴山房』は兎に角小じんまりと出来上つた奥床しい門構の家だつた。」と言ふ一文がどうしても六のリイブクネヒトと無関係とは受け取れないからである。それは何もリイブクネヒトでなくてはいけなものではないにしろ、芥川が言うように「新時代」のあることを象徴するものであればよいの

であるが、やはり、マルクスやレーニンでは余りにどぎつい感じがし、芥川のイメージとはかけはなれるゆえ、それは、やはり、リイブクネヒトでよいのであつて、またリイブクネヒトであるべきなのかもしれない。

了

参考文献

- | | | |
|-------------|-------|-------|
| 「芥川龍之介」 | 吉田精一 | 吉田精一 |
| 「文芸読本芥川龍之介」 | | 山本健吉編 |
| 「芥川龍之介」 | | 宇野浩二 |
| 「芥川龍之介の世界」 | | 中村真一郎 |
| 「芥川龍之介全集」 | | 筑摩書房 |
| 「芥川龍之介の死」 | | 吉本隆明 |
| 「芥川龍之介と太宰治」 | 解釈と鑑賞 | |
| 「作家と自殺」 | 解釈と鑑賞 | |